

を好み、堀川の流を慕ふ、且兄はかねて佛學をも好み、殊に三論に通ず、弟は本草に委しく、又畫を能す、又雅樂を好むこと兄弟ともにひとしく、道遠しといへども、音樂ある處といへば必ゆく、友愛深くして、兄の妻ある後も久しく同居す、弟學文などにつきて出る時、夜更て歸るに、戸を敲くことなし、纔に咳するを、兄速に聞つけて、戸を開くこと常なり、もし聞つけざれば、門に立て朝に至る。○下略

〔孝義録三〕奇特者なみ

なみは碧海郡上野上村の枝郷なる永覺新郷の百姓喜左衛門の妻なり、天明六年の九月、風あらくふきて、家を打たふしけるに、夫はこれを防がんとて外面にいで、ありければ、その姉の、目ごろやみてふしぬるを、なみひきたて、遁れ出しに、にはか事にて、娘の四ツばかりになるを、殘しをき、つるにおしにうたれて、失てけり、女の身にして、子のあやうきをみすて、やめるものを助けたる甲斐々々しきふるまひ、領主にきこえければ、おなじき八年の十二月といふに、褒美して米をとらせしとぞ。

〔孝義録二〕兄弟睦者たつ

三重郡芝田村の氏權平が妹をたつといへり、兄は病おほき者にて、四十年ほど起臥もかなはぬ上に、八年先より目しるけり、もとより無高者なれば、たつは村のうちをはしり廻り、請作とて人の田畑を耕して世を渡りけるが、家極て貧ければ、たれ聾にならんといふ人もなく、をのれも男にまみえん事をおもひきり、兄の側にのみありて、起臥にこゝろをそへ、木綿糸くる業をなし、又は村のいそがはしき時は、近きあたりに雇はれ、その賃をとりて、世わたりの助とし、兄には穀物をたべさせ、己は菜大根の糧ばかりくらひけり、兄は煙草を好めるが、手足かなはずして、きせるさへ持事あたはざれば、人の家にもありても、いく度となく歸りきて、その諸用をもたしてけり、冬